

共通教育の原点

柴野 均

人文科学系

大学におけるいわゆる教養教育に関してさまざまな改革案が論議され、実行されてきた経緯に対しては、大学に職を持つ者として関心を寄せてきた。その間いろいろと考えることもあったが、今回こうして共通教育に関して発言する機会を与えられたので、文章としてまとめてみることにする。以下、読んでいただければおわかりと思うが、これはわたし自身の個人的な経験から生まれた見解であって学部の意見を代表するものではないことを前置きしておきたい。

わたしは1967年に大学に入学している。つまり、ちょうど30年前のことになる。で、その当時の教養学部での教育を受けたわけだが、それが良くも悪くもわたし自身の教養教育に関する原イメージになっている。67年入学ということは、本来二年間の教養教育をまともに受けたのは一年間であったことを意味する。二年次の初夏から無期限ストライキが始まって、ほぼ二年間は正常な授業がなかった（あるいは自主的に授業をボイコットした）からである。そして、正常化ののちの学部側の対応は、とにかく「紛争」時に在学していた学生をできるだけ早く専門課程に送り出してしまおうというもので、授業らしい授業もなく試験もなく進学してしまった。（自分が教師という立場に立っていま考えてみると、大学側がそうした方策をとった理由はわからないでもないが、やはり姑息なやり方であったと思う。）

したがって、わたしが受けたのはわずか一年間の教養教育だが、これがいま思い出しても本当につまらないものであった。学生数60人程度の外国語の授業を除けばほとんどが大教室での講義であった。大学の教養課程に関しては「マスプロ教育」批判がその当時からあったが、大教室での大人数の講義そのものに問題があるという風には当時もいまもわたし自身は感じていない。そのことを不満とする声は少なくともわたしの周囲ではなかった。

問題は講義の内容にあった。つまり、「～概説」「～概論」というような題目の授業が多いのだが、本当におもしろい講義をする教師は片手の指にも満たないほどであった。それは年度初めに買わされる教科書をざっと見ただけでもう判断がついた。自分が講義をする立場になってしみじみ感じたことだが、ひとつの学問体系への手ほどきを、初学者にもおもしろく、深い内容を込めて講義をするのはたしかに難しい。それにしてもあの時に聞いた講義の数々は、それはひどいものだった。高校を出たばかりの右も左もわからない子どもたちに聞かせようという講義ではなかった。知的な好奇心を聞く者の中にかきたてるような講義ではなかった。そういう意味では教養教育の担当者には相当なベテランで、業績も人格もこれ以上はないような人を配すべきだとわたしは考えている。

また、これは講義の内容とも深く関わっていることだが、大学教師たちの Oral Performance がひどいものにも呆れてしまった記憶がある。マイクがなければ教室の端まで声が届

かない、発声そのものにも問題があって口跡不明瞭な教師たちの講義を一日聞いていると、頭が痛くなってしまった（これはいまでも教授会で同じような印象を受けることがある）。自然に教室から足が遠のき、いわゆる「五月病」ともいえるような症状がわたしの場合にもあらわれた。自分が大学の教員になって初めてわかったことは、論文の書き方は教わっても、そうした「講義のやり方」に関するプラクティカルな教育はまったく受けてこなかったことである。これにはずいぶん困った。そうなるとう結局、教えられたように教えるしかなくなるのである。

正常化されたあとの大学では、変革の第一弾として教養学部生を対象としたゼミナールが始まった。そこでわたしは日本文学で相当な業績を残していた教師のゼミに出たのだが、これがやはりがっかりする内容だった。ゼミの中身は中世の古典の講読であったが、それはまるで教師の独り言を居並ぶ学生たちが拝聴するといった類の授業であった。その授業に出てわかったのだが、学者として優秀でも教育者としては最低に近い人たちが大学の教員になり、その後も教育する能力は磨かれることがないのである。授業の中でナニヲ、ドノヨウニ教えるかはまったく個別の教員に任されていて、そこには他者が口を差し挟む余地がない。

大学で教えるようになってもう20年近くになるが、講義のやり方は自分で考えるしかなかった。いわばナニヲにあたる、講義のテーマとか話す内容を練ることなどは論文を書くことと共通するものではあるが、それをドノヨウニ伝えるかも同じくらい大事なのではないか。共通教育も専門教育も制度をどのように変革しても、とどのつまりは良い授業を、良い演習、良い講義を教師が学生に提供できなければ、絵に描いた餅に過ぎない。

近年わたしは自分の講義に関して学生から不定期的に感想を集めるようにしているが、その中には思わぬ反応があって非常に勉強になる。話し方についてはおしなべて「しゃべるのが速すぎてノートがとれない」という反応がほとんどで、さすがにそれを見るとゆっくり語りかけるべく心がけるようになる。また、レジュメを配って講義することも、年々ノートをとることを難しいと訴える学生が増えてきたことから、始めた。大学の教員もひとりひとりがそれぞれに工夫して授業を展開していることは、諸先生方とお話する中で推察できることが多い。やはりそういう努力を個々人の努力にとどめてしまう現在のシステムが問題とされるべきであろう。

学生による授業評価もけっこうだと思し、大胆なカリキュラムの再編成もやった方が良く思うが、学生と教師がいて教育が成り立つのであり、授業を知的なエネルギーが交流する場にするには授業者としての教師の力量を高める視点も大いに必要だろうとわたしは考えている。そのためには教員同士の関係の組み直しを含めて、多大なる時間とエネルギーを費やすことになるだろう。しかし、その努力を惜しんでいては大学の未来はないだろう。